

評価分類			個人の自己評価平均	
I 保育の計画性	1	園の教育理念・教育方針の理解	保育教諭	B
			給食・事務・運転手	B
	2	幼稚園教育要領の理解	保育教諭	B
			給食・事務・運転手	B
	3	指導計画の作成	保育教諭	B
			給食・事務・運転手	B
	4	環境の構成(人,物,事)	保育教諭	A
			給食・事務・運転手	B
	5	保育と計画の評価、反省	保育教諭	B
			給食・事務・運転手	B
<p>I 全体としての評価及び今後の課題</p> <p>園の教育理念や方針、教育要領はそれぞれに理解している。だが、それを下に指導計画を作成し、振り返り反省することについては、伝達やまとめ方の面で課題が残った。保育教諭だけではなく全体で話し合う機会を多く設け、全体が保育に対する意識統一を図り、伝達する手段を模索していきたい。</p> <p>キリスト教保育の根幹である園児一人ひとりが愛されていることを実感できる環境構成については、十分意識できていた。</p>				
II 保育の在り方 幼児への対応	1	健康と安全への配慮	保育教諭	A
			給食・事務・運転手	B
	2	幼児のみとりと理解	保育教諭	B
			給食・事務・運転手	B
	3	指導とかかわり	保育教諭	B
			給食・事務・運転手	B
	4	保育者同士の協力・連携	保育教諭	A
			給食・事務・運転手	B
<p>II 全体としての評価及び今後の課題</p> <p>健康と安全、特にケガについては、十分な配慮を持って臨むことができた。園舎の構造自体、見渡しが良く細部まで安全管理のできる工夫が施されているので、それを活用すると共に、園児自身もその利用の仕方・安全管理を自ら学ぶよう促していきたい。一人ひとりの園児のみとり・理解については保育者同士、協力・連携しながら取り組むことができたが、2号認定児の保護者・バス利用の保護者との関わりなども少なくならいよう工夫していくことが課題である。今後、更なる連携の下に、一人ひとりの園児を多面的にとらえ深く理解し、園児の心に寄り添った保育を心がけたい。</p>				
III 保育教諭としての 資質や能力・良識	1	専門家としての能力	保育教諭	B
			給食・事務・運転手	B
		良識とマナー	保育教諭	B
			給食・事務・運転手	A
	義務	保育教諭	A	
		給食・事務・運転手	B	
	2	組織の一員としての在り方	保育教諭	A
			給食・事務・運転手	B

	3	保育の楽しみ・喜び	保育教諭	A
			給食・事務・運転手	A
	4	周りを感じる感性・アンテナ	保育教諭	B
			給食・事務・運転手	A

Ⅲ全体としての評価及び今後の課題

専門家として、組織の一員でいること、幼児と共に生活していくことに大きな喜びを感じ、向上させたい意欲が十分にある。今後も幅広い視野を持ち、様々な分野で感性を磨いて資質・能力の向上に繋げていきたい。

Ⅳ 保護者への対応	1	情報の発信と受信	保育教諭	B
			給食・事務・運転手	B
	2	協力と支援	保育教諭	A
			給食・事務・運転手	B
	3	守秘義務の遵守	保育教諭	A
			給食・事務・運転手	A
	4	対応上のマナー・良識	保育教諭	A
			給食・事務・運転手	B
	5	クレームへの対処の仕方	保育教諭	A
			給食・事務・運転手	B

Ⅳ全体としての評価及び今後の課題

保護者に対して、誠意を持って真摯に対応することができたが、一部の保護者には違った受け取り方をされることもあり、こちらの想いを伝える難しさも感じた。今後、園に来ることの少ない保護者への対応を更に積極的に進めるなど、努力を続けていきたい。

Ⅴ 地域や自然や社会との関わり	1	地域の自然・人々とのかかわり	保育教諭	B
			給食・事務・運転手	B
	2	小学校との連携	保育教諭	B
			給食・事務・運転手	B
	3	地域支援・開放	保育教諭	C
			給食・事務・運転手	B

Ⅴ全体としての評価及び今後の課題

小学校の生活発表会へ見学に行ったり、「わんぱく広場」という地域開放の時間を持ち、地域と関わりを持つことに努めた。だが、その状況・気づきを報告しあう場が持てず、全体が関わっているという意識を持つのは難しかった。今後、職員全体での会議の場などでも報告しあい、全体で関わるができるよう努めたい。

Ⅵ 研修と研究	1	研修・研究への意欲・態度	保育教諭	B
			給食・事務・運転手	B
	2	遊具・教材に関する研修・研究	保育教諭	B
			給食・事務・運転手	B
	3	環境に関する研修・研究	保育教諭	B
			給食・事務・運転手	B
	4	今日的課題に関する研修・研究	保育教諭	B
			給食・事務・運転手	B
	5	自らを高める学習	保育教諭	B
			給食・事務・運転手	B

VI全体としての評価及び今後の課題

専門家としての研究・研修は、各自意識して取り組んできた。今後は、個人の研究・研修を全体のものにする工夫をしていき、日々、変化している情報・専門知識を学び、保育に生かしていきたい。

総合的自己評価

今年度から幼保連携型認定こども園に移行、全てが模索しながら試行錯誤の年となった。保育教諭だけでなく給食・バス運転手・事務職員と職種も広がり、職員数も増加、昨年度までにはない、新たなシステムを考える必要も出てきたが、それぞれの職員は個人個人精一杯の努力をしてきたと思う。役割を分担・明確化・組織化して「連携」が重要なポイントとなった一年だったと思う。今年度の反省を生かし、役割を担当化し、それぞれの報告・協議できる時間を工夫しながら、風通しの良い雰囲気を作り、最も大切にしている「愛」のある独自の園らしさを失わないよう歩んでいきたい。この自己評価により謙虚に自分を見つめ、見えてきた課題を解決できるよう都度考え合い、これからも更に研鑽を重ね、成長していく園でありたいと願い今年度の自己評価とする。

2018年度の課題

以上 2017 年度の評価結果から 2018 年度の課題は、以下の 4 項目とする。

1. 一人ひとりの子どもをより丁寧な保育
2. 遊びの充実に向けて
3. 研修の充実
4. 勤務体制の組織化